

## 登録記念物の登録

## 《登録記念物（遺跡関係）の新登録》 1 件

### 1 <sup>あがり お う おき い せき</sup>東奥武沖遺跡【<sup>しまじりぐん く め じまちょう</sup>沖縄県島尻郡久米島町

東奥武沖遺跡は久米島の東部にある東奥武（<sup>あがり お う</sup>オーハ島）の東側から南側にかけての水深2m未満の海域に所在し、14世紀末～15世紀初頭の中国産青磁や白磁の碗・皿・盤などの食器類、中国産や東南アジア産の壺や甕などの貯蔵具が多数散布している。同種の陶磁器は沿岸を經由して島内に搬入され、尾根上に築かれた<sup>う え ぐすくじょうあと</sup>宇江城城跡などの陸域の遺跡においても大量に出土しており、海域と陸域の傾向が一致しているのが特徴である。当該期は琉球の明に対する朝貢貿易の回数・隻数がピークに達する時期であることから、明への朝貢貿易の最盛期を考古学的に裏付けるものであると考えられている。

これらの陶磁器は東奥武（<sup>あがり お う</sup>オーハ島）の南東方向に伸びる浅瀬を起点として北側と西側の海域に分布しており、この浅瀬において船舶が座礁・沈没し、積荷の陶磁器がその後の潮流の影響で広がっていった可能性が考えられ、水中遺跡における遺跡の形成過程を考える上でも重要である。

このように、東奥武沖遺跡は14世紀末から15世紀初頭における琉球の明への朝貢貿易の一端を裏付ける資料が海域に良好に残されているとともに、水中における遺跡の形成過程を考える上で重要である。

## 《登録記念物（名勝地関係）の新登録》 5 件

### 1 <sup>おのはら して いえん</sup>斧原氏庭園【<sup>にしのみやし</sup>兵庫県西宮市

斧原氏庭園は西宮市南部の住宅街に位置する。作庭家で庭園研究者の<sup>しげもりみれい</sup>重森三玲（1896～1975）は、昭和15年7月頃に三越大阪支店住宅建築部技師の<sup>おかだたかお</sup>岡田孝男から斧原氏の庭園の設計を依頼された。同年9月7日の重森の現場確認後、9月24日には設計図が出来上がり、10月から現場の工事が始まった。

庭園は建物の南側にあり、全体は長辺約23.5m、短辺最大約10mの長方形に近い形である。斧原氏の希望で、東側は花を植えたり芝生敷としたりするための空間とされ、西側が枯山水になっている。枯山水は、建物から見て手前に白砂の曲水、奥に築山を造り、築山には多くの立石を用いて石組を施している。逆S字形を描く曲水は、築山の左手の裾に端を発し、左から長く横にのびる奥の出島を回り込んだ後、右からのびる手前の長い出島を回り建物の前面に至る。奥の出島は芝生のみとし、手前の出島には当初5本のマツ類が直線状に植えられ、先端には石燈籠が据えられたが、その後マツ類は3本となり、石燈籠は失われた。平成7年1月に発生した阪神・淡路大震災で建物が被災し、その後建て替えられたが、庭園に影響が及ばないように新しい建物の平面配置は以前の形が踏襲された。

## 2 <sup>きよはら していえん</sup>清原氏庭園【<sup>あしやし</sup>兵庫県芦屋市】

清原氏庭園は芦屋市南西部の住宅街に位置する。昭和40年に、作庭家で庭園研究者の<sup>しげもりみれい</sup>重森三玲（1896～1975）の設計により造られた。重森は昭和15年に西宮市の<sup>おのはら</sup>斧原氏の庭園を設計したが、清原氏はその庭園を見て気に入り、自身の邸宅を建築する際に重森に設計を依頼したという。

庭園は、東西約10m、南北約6mの長方形で、周囲を建物に囲まれている。樹木を用いず、石、砂、コケ類を材料とする石庭で、中央部分に白砂とコケ類で雲のような形を表現し、その周囲に玉石、さらに外側に花崗岩の平石を敷く。石敷部分には北西から南東に直線状に青石の景石を8つ立て、雲のような形状の曲線と対照をなす。また、色彩も特徴的であり、白砂の白色、コケ類の緑色、玉石敷の灰色を中心とした色、平石敷の赤茶色、立石の青色など、それぞれの素材の色が意匠の中でよく引き立っている。平成7年の阪神・淡路大震災でも大きな被害はなかったが、平成22年に道路工事の関係で敷地の一部が削られて建物が建て替えられた。新しい建物の建築に際しては、建物の平面配置は庭園に配慮され、影響は沓脱石の移設のみにとどめられ、ほぼ旧状が保たれた。

## 3 <sup>きゅうたかはら していえん</sup>旧高原氏庭園【<sup>かさいし</sup>兵庫県加西市】

旧高原氏庭園は、加西市南西部の山裾に位置する。高原氏は、江戸時代後期にこの地に移り住んだと考えられており、木綿商や農業を営みつつ、その後金融業にも携わるようになった。6代目の<sup>たかはらじゅう たろう</sup>高原重太郎（1868～1933）は、米穀、肥料、石材、火薬など、多くの商品を取り扱って成功を収め、明治42年5月から自宅の「中座敷」の建築や庭園の整備に取り掛かった。工事は明治44年1月頃にほぼ完了した。

庭園は、東に舌状に突き出た山の南裾に沿うように造られており、大きさは東西最大約30m、南北最大約20mある。入口のある東側から西側に向かって狭くなっており、全体の約3分の2を占める西側の上段部と、それより高さが約1m低い東側の下段部から成る。上段部には「奥座敷」（明治20年代建築）があり、「奥座敷」から見て右手側と前面に庭園が広がる。右手側には「赤畳石」を敷き詰めた流れが設けられ、それは岩島のある前面の園池「<sup>うえ</sup>上の池」へとつながっている。下段部は「中座敷」を中心とし、その前面に中島のある「<sup>した</sup>下の池」が設けられている。「奥座敷」と「中座敷」の縁先からは飛石が縦横に打たれ、それらが上段と下段をうまくつないでいる。

#### 4 ウトノアナ・ゼゼノサマ【大分県豊後高田市】

ウトノアナ・ゼゼノサマは、国東半島南西部の田染たしづに所在し、その最南部の田染平野たしづひらのにおける熊野集落くまのと田野口集落たのくちの境地として南北に連なる岩峰群の東側、熊野集落から望まれる名勝地である。熊野集落は、古くは「大日岩屋」や「不動岩屋」として記載された熊野磨崖仏くまのまがいぶつのある鋸山のこぎりやまの北西麓にあり、行場が開かれた地域である。その成り立ちは、今熊野寺いまくまのじの坊集落で、その境域の西限には「赤岩」があったことが記されている。

赤く染まった岩壁の裾には、江戸時代に国見（現在の国東市国見）の赤根社あかねしゃから祠を勧請して善神王（ゼジンノウ／ゼンジョウオウ：武内宿禰たけのうちのすくねのこと）を祀ったとされている。長く親しまれて来たこうした風致景観は熊野の耶馬やばとして知られ、いまではウトノアナ（洞の穴）・ゼゼノサマ（善神王様）と並び称されている。ウトノアナ・ゼゼノサマは、麓を流れる熊野川から比高差約100mの火山碎屑岩から成る岩峰群の高所に空いた大穴と赤く染まった巨岩を特徴とする風致景観を成している。熊野集落から熊野社に向かう鳥居の辺りからは、右手に高さ70mほどのところに大穴を抱くウトノアナ、左手に高さ80mほどのところに赤い岩肌を見せるゼゼノサマを望む。

この地域における古代、中世、近世にわたる信仰などと結びついた特徴ある岩峰群の風致景観として意義深い。

#### 5 金武鍾乳洞（日秀洞）【沖縄県国頭郡金武町】

金武鍾乳洞（日秀洞）は金武町の南東部に位置する。5つの洞穴から成る洞穴群の1つで、東西方向に約200mのびる。いくつかある開口部の1つが観音寺かんのんじの境内にあり、そこから内部に入ることができる。

16世紀前半に金武間切きんまぎりに漂着した真言僧日秀にっしゅうは観音寺を開創し、また鍾乳洞内に熊野権現を祀ったと伝わる。

戦時中には、沖縄戦において地元住民や沖縄本島中南部から逃れてきた人々の避難場所となったが、戦後は再び宗教的な空間となり、昭和30年代に、当時の観音寺住職により手摺や照明が整備されて一般に公開され、景勝地として広く認識されるようになった。

金武鍾乳洞は、琉球石灰岩が侵食されてできたもので、延長が約200mある。観音寺の境内にある開口部から下へ降りてゆくと、権現を祀る空間があり、そのまま進むとやがて「大広間」と呼ばれる空間に出る。「大広間」は、東西約40m、南北約40m、高さ最大約13mの広さで、形成後数千年から数万年が経っていると考えられている。多数の鍾乳石や石筍のある広い鍾乳洞の景観は非常に特徴的であり、訪れる人々を驚かせる。